



■ 新型コロナウイルス感染症に関連した対応について

新型コロナウイルス感染症拡大防止対策のため展示の一部を除いて参観いただけます。

詳細については、憲政記念館のホームページにてお知らせします。ご迷惑をおかけしますが、ご理解、ご協力をお願いいたします。

特別企画展示のご案内

＜館蔵資料と事務局文書で見る議会の歩み＞

憲政記念館では特別企画展示「館蔵資料と事務局文書で見る議会の歩み」を開催しております。

本特別企画展示は、1890年（明治23）11月の帝国議会の開幕から、大正の本格的政党内閣誕生を経て、激動の昭和に至り、太平洋戦争後、国会として再出発する我が国議会の歩みの一端を憲政記念館所蔵資料と衆議院事務局文書により紹介するものです。

開催期間は令和2年9月11日（金）から12月20日（日）までです。

特別企画展示
館蔵資料と
事務局文書で見る
議会の歩み

2020年
9/11(金)→12/20(日)
入館無料

衆議院憲政記念館
〒100-0014
東京都千代田区永田町1-1-1
TEL:03-3581-1651
FAX:03-3581-7962
開館時間 9:30～17:00（入館は16:30まで）
9月30日（木）、10月31日（日）、11月30日（月）
志願記念館のホームページは上記のホームページからご覧いただけます。
歩みながらの携帯電話、スマートフォンのご利用はご遠慮ください。 ※一部写真に著作権が認められています。




絵画「第一回国会開会式」宮永岳彦

もう一つの議会史～国会職員オーラルヒストリー～Ⅱ 大八木 とし子さん（その1）

憲政記念館では、衆議院事務局の元職員へのインタビューを実施し、個々人の体験の中にある「議会史」に焦点をあてる「もう一つの議会史～国会職員オーラルヒストリー～」の連載を第20号から開始しています。

今号から、高校卒業後、衆議院速記者養成所に入り、その後長年にわたり衆議院速記者として活躍された大八木とし子さんを取り上げます。

	
＜大八木とし子＞（おおやぎ・としこ）	
昭和23年3月	生まれ、東京出身
昭和41年4月	速記者養成所入所
昭和43年10月	衆議院参事、速記士補
昭和44年10月	速記士昇任
昭和47年10月	主任速記士昇任
昭和57年7月	速記副監督昇任
昭和61年7月	速記者養成所教授
平成3年10月	速記者養成所から記録部第四課へ異動
平成4年7月	速記監督昇任
平成10年4月	速記者養成所副所長
平成14年8月	記録部第四課調整主幹
平成16年1月	記録部第三課長兼第四課長
平成16年7月	記録部第一課長
平成18年7月	記録部副部長
平成20年3月	退職

つくりましたが、見ていただいた感想を。

○大八木氏 養成所が持っていたいろいろなものを養成所の閉所¹に伴って憲政記念館にお預けして、それをああいこうコーナーという形にしてつくってくださったということで、本当にありがとうございました。こういう形で一般の目にとまるということは、速記文化をわかっていただく、残すという意味でも意義が深いのではないかなと思いました。

（授業風景の）ビデオがとても印象的でしたね。ああ、懐かしい、ああやって授業をしたなと思い出しました。

【衆議院速記者の役割】

—— 速記者とはこんなことをしている人だという御説明をいただければ。

○大八木氏 はい、国会は本会議や予算委員会などの会議録を作成していますが、その議事部分を担当しているのが速記者です。議事は速記法によって記録するという規則²があって、速記者は本会議やすべての委員会に臨場してそこでの議論を速記法によって書き取

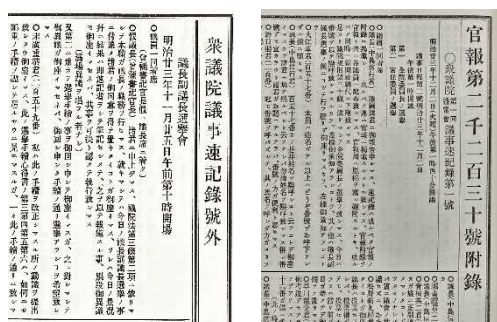
—— 憲政記念館に速記コーナーを

¹ 衆議院では、1918年（大正7）から事務局みずから速記者の養成を開始し、衆議院速記者養成所の名称は1933年（昭和8）に規則上定められた。その教室又は校舎は衆議院の構内又は近辺にあったが、1962年（昭和37）10月に現在の世田谷区上用賀に移転（用賀校舎）し、2006年（平成18）12月、閉所された。

² 衆議院規則第201条 議事は速記法によってこれを速記する。

り、それを日本語に書き起こして速記録を仕上げます。

今では新しい音声自動認識という方法にはなりましたが、明治の第1回帝国議会以来、日本は完全な速記録を備えていて、その歴史を刻む仕事に携わっているというのが私たち速記者の誇りでもあるんですね。



左：衆議院議事速記録号外 第1回帝国議会召集日(1890年(明治23)11月25日)の議長副議長選挙会で速記者による議事速記録の作成が議決された。
右：衆議院第1回通常会議事速記録第1号 1890年(明治23)12月3日、衆議院議事速記録第1号が官報附録として刊行された。

【志望動機】

—— 先ほど御説明になられた速記者という職業、業務があるのをどこでどうお知りになって、そして、なろうとしたきっかけはいかがでしょうか。

○大八木氏 それはもう個人的なことになりますけれども、自分がいた高校というのは進学校だったので、ほとんどの人が大学を目指していたんですけども、経済的な事情がありまして、というのは、ちょうど父が、私が高校生のときに事業に失敗してしまって、ちょっと進学は無理かなと思ったことと、ただ、奨学金を受けて大学に行くという道もあったと思うんですけども、そこまでの根性がなくて。それと、その時代は大学を出ても女性が対等に働ける職業といえば先生になるぐらい

しかなくて、それは自分には向いていないなど。それでいろいろ「蛍雪時代」³を見ていたら、最後の方に募集広告というか、こういう学校があるという紹介記事を見たんですね。ああ、ここ、いいなと思って。何しろ、学費が要らない、かつ、お手当をもらえるというところにとっても魅力を感じたというのが第一ですね。それと、自分の性格にも合っていると思いました。

【入所試験】

—— 昭和41年の3月15日に入所試験があったんですね。遅いですね。

○大八木氏 要するに、私はここしか受けなかったんですけども、ほかの大学がダメだった人も拾おうというか、そんな感じで一番遅くに設定しているんですね。

—— 先ほどの速記コーナーにも展示してあるんですけども、平成16年の適性試験が一、二、三とありまして、そのほかに現代国語と英語のよくあるような入試問題みたいなものがあります。

大八木さんのころも似たような感じでしたか。

○大八木氏 私たちのときは社会という科目がありましたね。

—— 適性試験の一は、これは多分、速記符号をまねて書けるかという試験ですね。

○大八木氏 そうですね。

—— 適性試験の二は、何か文章を読み上げて、それをメモしてどこまで書き取れるかという試験ですね。

○大八木氏 そうですね。

—— 適性試験の三は、完全に句読点とかがなくて、片仮名がだらだらっ

³ 定期刊行の大学受験専門誌

と書いてあって、これを文意に従って漢字まじりの文章に直すという試験ですね。

こういう適性試験、特に三の片仮名だけの文章、これは受験勉強といえますか、何か対策とかはやられたんですか。

○大八木氏 それはもう何も勉強はしませんというか、しょうがなかった、その場だけの出たところ勝負だったと思います。

—— 合格したときの感想は。

○大八木氏 英語がちょっと自信がなかったのですが、受かったと聞いたときはそれはうれしかったです。

【速記者養成所入所】

—— 入所したときの感想は。

○大八木氏 とにかく、小ぢんまりして、採用された人数そのものが少人数なわけですね、入所は17名です。17名が一つの教室で授業を受けるんですけども、私たちは団塊の世代だから、高校も6クラスあったりとかそういう環境だったので、非常に少人数で授業を受けることに新鮮さを覚えた記憶がありますね。

—— 女性がやはり多い感じですか。

○大八木氏 募集要項に女子若干名と書いてあったんです。それで、受験しに行ったら、女性がいっぱいいるわけですね。何百人受けたんですかね。だから、絶対受かるはずないなと思っていたんですけども、入ってみたら女性がたくさんいるので驚きましたね。

私は50期なのですが、受験者数418人で、男子が87名に対して女子が331人です。だから、1対4ぐらいですね。それで17人の合格です。男性6人、女

性11人。

随分たってから、その女子若干名という文字が消えたんですね。実態としては女性を多くとらざるを得なかったというか。

要するに、男性が欲しいわけですよ、女子若干名と書くということは。荒れている国会だったりするし。

—— 何か深夜国会の話とか、いろいろあるみたいですね。

○大八木氏 男性が欲しいけれども、応募してくる人は女性の方が多いというので、それまでは高校卒業生に限っていたんですが、昭和39年に、オリンピック開催の年ですね、男子は一浪まで受験してよいよということになったのです。だから、先輩にはそういう人がいたみたいですね。

【養成所の授業】

—— 養成所時代の授業ですけれども、まずはやはり速記符号が第一にあるかとは思うんですけども。

○大八木氏 そうですね。入ってすぐは、夏休みまでかけて、一から符号を勉強します。

ほかにも、漢文、英語、経済、フランス語、法律など、一般的な教養を身につけるための学科があります。それは外から講師をお招きしてやるんです。

あと、内部の教授が、実務的な、用字例⁴の関係とか用語の関係とか速記史、そういった科目は担当します。

—— 速記符号の勉強はどんな順番に進んでいくものなんですか。

○大八木氏 (符号) 教程というものがあまして、(教授が)それを、どっと渡すんじゃなくて、その日覚えるものを渡したんです。

⁴ 会議録の用字をなるべく統一するために、用字の基準となるべきものを事務用として衆議院記録部が編集したもの

これに従って、養成所に入所して翌日か翌々日ぐらいから、「速記法」といって、符号を学ぶ授業が始まるわけです。これはこんなに分厚いんですけども、その日教える分だけが配られるんです。

それで、私の時代のことで申し上げますと、毎日配られる教程がぬれているんですよ。なぜかといったら、当時、リコピーという機械ができて、青焼きというんですか、それでコピーしていたんですね。それで先生が毎回青焼きを持って上がってくるんです。

—— ある種のテキストですね。

○大八木氏 そうです、これが大事な大事な原本というか。

速記符号というのは、これをごらんになるとわかるように、長さだったり角度だったりカーブしていたり、あるいは位置を使ったり、そういうのでいろいろ複雑なんですよ。

人によっては、自分はこう書くのではなくてこう書いた方がいいとかと自分で工夫したりする場合もあって、かつては符号もいろいろあったんです。私は教えていただかなかったんですけども、西来路秀男さんという方がいろいろな符号を全部まとめて一つ符号体系をおつくりになったわけです。それを教えていたんですけども、その符号というのは西来路さんの頭の中にみんな入っていて、教えるときは、西来路先生が黒板に一々板書をする。それを生徒が紙に書いて、自分の教程をつくっていった。

だけど、もう西来路先生が退職される年齢になって、結局、3人の先生が後を継いで分担して教えようということになったんですが、その3人の先生が自由に教えたのでは統一がとれないわけですので、45期を教える西来路先

生の授業を、分担して聴講して、それを学んだ。それを3人が持ち寄って、それで作ったのがこの「教程」ということになります。

その日教えたことがちゃんと覚えられたかどうかは、翌日の速記法の授業の最初に先生が、最初は短文ぐらいを言って、その符号がすぐ出るかどうかというテストが始まります。

ある程度書けるようになると、反訳練習といつて、先生が、今まで習った符号だけで書ける文章をつくって、それを朗読するわけです。最初は多分(10分)600字ぐらいの速さ、ゆっくりです。それで、生徒がそれを符号で書いて、また自分の符号から日本語に反訳するという形になります。

それが最初ですけども、だんだん反訳の速度が上がって行って、週3回、1日置きぐらいに反訳のテストがあるんですよ。それから、毎月月例テストというものもあるし、休暇が終わると休暇明けテストがあったり、9月の初めには最初のクラス分けテストみたいなものも行われてというようなことで、テスト漬けになっちゃうんです。

それで、夏休みが終わって何回かするうちに、速度についていける人と、ちょっとなかなか速度が上がらない人とかという、そういう意味で2クラスに分かれたり、3クラスに分かれた年もありますね。

毎月、月例テストがあるので、そのテストでまた、最初はAクラスにいたのがBクラスになったり、Bクラスにいた人がAクラスになったりということはあります。固定はしません。だけれども、いずれはだんだん決まってしまうんですよ。

成績に差がつくというのは、書いていて順調に先生の言葉を符号化してい

ければ別に問題はないわけですがけれども、あ、この符号何だっけとつかえてすぐ出てこなかったりすると、先生の言葉が先に行っちゃうから、覚えていられなくて、書けなくなっちゃう。そのとき聞こえたところからまた書き始めるんですけれども、その書けなかった部分を「抜ける」と言います。抜けるっちゃうんですよ。

その言葉が何かを覚えていれば書き足すことも後からできますけれども、なかなか難しいので。それで、せっせと反訳していても、符号が書いてなければその部分が白紙になっちゃうというわけなんです。

反訳が終わると、その原稿はお互いに隣の人と交換して採点が始まるんです。先生が問題を読み上げると、あ、違うなというところは、ちょっと待ってください、もう1回読んでくださいと言って赤鉛筆で友達が直すわけなんですよ。

だから、ミスが多いと何回も先生の朗読をとめて直すわけなので、生徒の間ではもう成績はばれはれになるわけですよ。この人の反訳はきょうは大変だったなとかノーミスだとか、ノーミスはなかなか難しいんですけれども、一つか二つしかこの人はミスを出さないわとか、もう隠しようがない。そういう感じです。

それで、その反訳のことを替え歌にした人がおまして、私たちの時代じゃなくで、3、4年たったころかしら。藤圭子の「夢は夜ひらく」というのがはやったでしょう。54期の人だったかな、

赤く咲くのは ミスの花
白く咲くのは 抜けの花
どう咲きゃいいのさ このアタシ
きょうも差はひらく

生徒の嘆きをこれほど言いあらわした替え歌はないんじゃないかなと印象深く思っています。

—— 週3回テストがあり、月例テストがあり…

○大八木氏 月例テストは3回続けてあるんです。だから、1日2回、午前午後、それから翌日1回。

今考えてみると、ああすごいなと思います。そのときは夢中でやっていましたけれども。

月に100ずつ速度が上がるんですよ。速記者は10分間が原則ですので、養成所も先生が10分間読むわけです。

最初、教程が終わったあたりでは1,500ぐらいだったかな。それで、夏休みに一生懸命練習したりして、9月の初めには1,700ぐらい。

それで、2年生の終わりのころにはもう3,000から、そして卒業するころには3,200とか3,400ぐらい書けるようになって、その間に速記検定1級、それを取るということです。

—— 速記検定は、日本速記協会によると、「アナウンサーがニュースを読む速さよりもさらにスピードを上げた速さ」と1級はなっていましたけれども。

○大八木氏 それが3,200なんです。

だから、養成所ではA組とB組に分かれていて、A組の人はそのころには3,400ぐらい書いているとすれば、もう楽々受かって、文部大臣賞をとったりするということです。

【印象に残った教授・講師】

—— 先生で何か。

○大八木氏 外部の先生がそうそうたる方がいらしたということで、その一人が舘稔先生でした。人口問題研究所の所長さんだったんですけれども、経

済を教えてくださいました。実に丁寧な言葉で講義をされていて、「でございまして」とか、速記の練習にちょうどいい速さなんです。3,000に行かない、2,800ぐらい。そうすると、講義を聞きながら、机の下でみんなこうやって指を動かして練習を…

宮田雅夫先生という方がいて、調べたところ、早稲田大学の仏文科の修士課程までいらして、速記の授業だけじゃなくてフランス語も担当してくださいました。

あと、私小説を書いている谷田達彌先生とかもいらっしゃる。みんな個性的でおもしろかったです。

小堀四郎先生という方も、それは何か早稲田大学の新聞学科をお出になっていて、そういう社会の問題をいろいろ講義してくださいまして…

あと、年配の関正治先生という方がいらして、その先生は地名が非常に詳しくて、全国市町村名一覧というのが教科書になって、日本の難読地名などを授業してくださいましてとか。

この全国市町村名一覧を使った授業は後もずっと続いていました。

でも、その先生は朗読の読み方が時折わざと速かったりするので、みんなすごく苦労した思い出があります。

だから、書きやすく読んでくださる先生と、意地悪じゃないんだけど、時々振ったりするという感じで、それでみんな鍛えられるわけです。

【本科2年】

—— 昭和42年、本科の2年に進級されました。

本科は、2年でよろしいですか。

○大八木氏 はい。

—— 42年に2年に進級したのが14名になっていますね。3名減っています。

す。

○大八木氏 3名は、まあ、ごめんなさいと。ちょっとあなたはついていけないから、退所した方がいいですよという勧告をするんですね。

—— 昭和42年の11月に日本速記協会の速記技能検定1級に合格されていますが、これを受けたのは自主的なんですか。

○大八木氏 いやいや、もう学校でこれを当たり前のように受けることになっていました。

私がとったときも、同期生がみんな全員受けるんですけども、男性が文部大臣賞をとりました。

—— では、これは学校の教育の一環として受けることになっている。

○大八木氏 それがないと（衆議院の）採用試験を受けられませんし。

—— 衆議院の記録部、速記者としての門戸は別ルートとして開かれている。

○大八木氏 そうです。採用試験は誰が受けてもいいわけだからということです。1級を持っていればね。



速記者養成所第50期本科卒業の同期生と
前列左が大八木氏

【研修科】

—— 研修科の生徒を研修生という、これはどういう立場なんですか。

○大八木氏 衆議院の採用試験を受け

てもいいよというか、入ることを前提にして、成績で選ばれた者が研修科に残るといふ形です。

そこで、衆議院には採用されなくても、ほかの就職先がまだそのころはいろいろありましたので、そういうところに就職を、先生たちが苦勞して、させていましたね。

—— 本科を卒業して衆議院以外に就職する人もいたということですか。

○大八木氏 もちろん。市議会とか新聞社とかですね。

衆議院の定員がありますから、この年は何人しか採れないよということであつたりするんですよ。

だから、逆に言うと、すごく余裕があるときはラッキーだったというか、教授も楽なんですよ。

本当は優秀なんだけれども入らなかつたという人もいるから、完全にその人が成績が悪かつたとは一概には言えないですね。

—— 研修科に行ける実力がある人でも、定員の枠によっては結局はじかれてしまうという形。

○大八木氏 何回も試験を繰り返したと聞いています。

—— 研修科のある場所はどこですか。

○大八木氏 同じ養成所の中にあります。お部屋が一つ動けば。

—— 研修科が数カ月ですか。

○大八木氏 研修科は、4月から9月の終わりまで、半年です。だから10月採用なんです。

—— カリキュラムとしては、やはり速記法が中心になるわけですか。

○大八木氏 実務的な学科はまだありました。実務的な、用字例とか用語もあつて、要するに衆議院にカスタマイズしていくわけです。

研修科に入りますと実習というのが新たに始まります。

実習というのは、何でも書けるんだよということ、実際の仕事を1度だけですが、やらせてもらいました。

私の記憶では、高橋展子さんといつて、労働省で婦人少年局長をやられた方なんですけれども、その方の講演を書いた記憶があります。生徒が分担してやるわけなんですけれども、何しろ先生の朗読以外で速記するのは初めてのことなので、やはり緊張して、それこそ、速度のいろいろや聞き取りにくいところもあつて、ああ、プロになるとはこういうことなんだなということを勉強しました。

その仕上げた原稿については、養成所の先生が点検して句読点の打ち方を直したりとか、それから原稿の仕上げ方ですとか、それは実習を通じてみっちり教えていただいたという感じです。

(以下、その2に続く)

※ 衆議院の速記については、YouTube 衆議院事務局チャンネルにある「【衆議院記録部】国会の速記」
(https://www.youtube.com/watch?v=_Q2xD9SycAI) でご覧になれます。

【発行人】 小松 幸喜
【編集責任者】 高橋 和彦

【印刷・発行】 衆議院事務局 憲政記念館
〒100-0014 東京都千代田区永田町 1-1-1
TEL : 03-3581-1651 FAX : 03-3581-7962



本紙について、私的利用・引用等著作権法で認められた行為を除き、無断で改変・転載・複製を行うことはできません。引用される場合には出所を明示し、また、転載等を行う場合にはあらかじめ当館へご連絡ください。